

アミーゴ会だより

2024年1月
通巻第57号
季刊 2024-I

www.mex-jpn-amigo.org



発行人：河嶋正之
編集人：河嶋正之
事務局：吉野 隆

新年のご挨拶

メキシコ・日本アミーゴ会
会長 河嶋正之

謹んで新年のご祝詞を申し上げます。会員の皆さんにおかれてはご家族お揃いでお健やかに初春をお迎えになられたこととお喜び申し上げます。本年が素晴らしい一年であることを祈念します。

メキシコ・日本アミーゴ会の活動は、2023年も感染症対策視点から対面活動を全面的に自粛しました。会員総会は8月にメール方式で行い、2022年度事業・決算報告、2023年度事業・予算案、会則改訂、幹事選任の議案が承認され、9月14日付けメルマガで会員の皆さんに報告しました（詳細は本誌第56号参照）。

第22回フィエスタ・メヒカーナが2023年9月16日～18日に東京お台場で前年に続いて開催され、メキシコと日本の絆を深める事業の一環として本会は例年同様に後援し、開会式で会長が挨拶する機会を得ました。初日の午後にはプリーア大使の音頭で **El Grito** (独立の叫び) の行事が再現されました。3日間ともに好天に恵まれ約10万人の来場者を迎えて盛況でした。また、懇親ゴルフコンペを7月11日に湘南CCで総勢23名の参加を得て実施できました。（ともに第56号参照）。

特別展「メキシコ古代文明—マヤ、アステカ、テオティワカン」が、メキシコと日本の外交関係樹立135周年記念事業として、6月16日～9月3日と東京国立博物館で開催され連日おおいに賑わいました。メキシコの“空気”を胸いっぱい味わう久しぶりの機会となった会員も多かったことでしょう。また、会期中の8月22日には、メキシコ独立記念日レセプションが同博物館で行われ会長が出席しました。来賓の林外相（当時）は「今後とも両国が長い歴史を刻むことを希望する」旨の挨拶をされました。なお、東京展の後は福岡展が10月3日～12月10日に開催され、大阪展が2024年2月6日～5月6日まで開催されます。

恒例のメキシコ歴史・文化講演会は、メキシコ三大文明をテーマに連続開講すべくメキシコ大使館とも協議して参りましたが、現在のところ本年3～5月を目処に日本人研究者3人を講師に迎えて、メキシコ大使館別館にて開催すべく取り組み中です。ご期待ください。

メキシコ・日本アミーゴ会はメキシコ大好き人間の親睦と両国の友好親善を目的とする、ボランティア活動団体です。引き続き、アミーゴ会員には「メルマガ」で多種多様なメキシコ関係事業をご案内するとともに、会報『アミーゴ会だより』を継続発行し会員相互の拠り所といたく存じます。今後とも会員の皆さまの積極的な事業提案と活動参画とを期待します。

メキシコ大統領選挙の投票が2024年6月2日に行われます。世論調査によれば、メキシコ史上初の女性大統領の誕生が確実な情勢です（第56号参照）。2月29日に大統領と上下国会議員の候補者届出が締め切られ、3月1日～5月29日の選挙運動を経て投票日を迎え、新大統領と新議員は10月1日に就任します。

2024年の干支は「甲辰（きのえ・たつ）」で、陽光があまねく生命の躍動をもたらす歩む年とのこと。しかし、地球上では世界大戦勃発を思わせる大規模武力侵攻が相次ぎ、他方では地震・噴火・風水害が頻発し、世界の分断が深まる複合危機の時代を思わせる事態が進行しています。「暴れ辰」は勘弁して欲しいものです。また、現代を「人新世」の時代と定義し、人類が地球環境に大きな影響を及ぼしてきたことの総括を求める要求もなされています。人類の英知の大いなる発揮でこのような“人災”と“天災”とが一日も早く克服され、人間の尊厳が回復されて平穏な日々が戻ることを大いに期待します。末尾になりましたが、今般の能登半島地震で被災されました皆さまにお見舞いを申し上げます。

(1月15日記)

= 目次 =

- | | | | |
|---|----------|----------|------|
| 1. 新年のご挨拶 | アミーゴ会会長 | 河嶋正之 | ...1 |
| 2. 新年祝賀メッセージ | 駐日メキシコ大使 | メルバ・プリーア | ...2 |
| 3. メキシコへの誘い：「ぶらりメキシコ—人旅9—テポツォトランで植民地時代を学ぶ」 | 会員 | 阿部修二 | ...3 |
| 6. お知らせ：メキシコ歴史文化講演／第5回ラテンアメリカへの道フェスティバル@お台場 | | あとがき | ...6 |

メキシコ・日本アミーゴ会による
メルバ・プリーア大使の新年祝賀メッセージ

MÉXICO

EMBAJADA EN JAPÓN



Mensaje de Año Nuevo de la Embajadora Melba Pría para la Asociación
"Amigo-Kai"

Tokio, Japón, enero de 2024

El Año Nuevo nos permite hacer una reflexión profunda sobre el que terminó en muchos aspectos. Los sueños y metas con los que lo iniciamos, los objetivos que cumplimos, las actividades que retomamos y también lo que quedó pendiente y lo que puede mejorarse.

Sin duda, el año anterior y los acontecimientos que el mundo vio durante él, nos hacen reflexionar también sobre la paz, la paciencia, la tolerancia y la armonía y la necesidad de tener estos conceptos en mente durante todo el año.

Como Embajadora de México en Japón, quiero sumar esfuerzos con la Asociación Amigo-Kai para expandir los lazos de fraternidad entre nuestras comunidades, subrayando el importante papel de la cultura y de la diversidad cultural para lograr que el mundo retome un camino de paz y armonía este 2024.

Atentamente,
Melba Pría
Melba Pría
Embajadora



メルバ・プリーア大使

2024年1月
日本東京にて

新年を迎えるにあたり、私たちは様々な観点から終わった1年を深く振り返ります。最初に掲げた夢や目標について達成できたもの、また再び取り組み始めたもの、そしていまだ達成できなかったことや改善すべき点など。

間違いなく、昨年世界で目にした出来事によって我々は、平和、忍耐、寛容、調和の大切さについて考えさせられ、1年を通してこれらの考えを心に留めておく必要性を痛感しました。

私は駐日メキシコ大使として、この2024年に世界が平和と調和の道を取り戻すために、文化と文化の多様性が果たす重要な役割を感じつつ、両国間の友愛の絆を広げるために、アミーゴ会と共に努力していきたいと思えます。

メルバ・プリーア
大使

(メキシコ大使館訳)

ぶらりメキシコ人旅

ーテポツォトランで植民地時代を学ぶー

(Tepotzotlan)

メキシコ・日本アミーゴ会 会員
写真家・ルポライター 阿部修二

はじめに

メキシコ市地下鉄2号線の北の終点クワトロ・カミーノ駅から郊外に向かうバスに乗り、高速道路57号線を40kmほど北上し、取り付け道路を10分ほど西進すると、巨大な教会にかしづくテポツォトランに着く。

その郊外バスは走る度に大きな音を発する。たぶんアメリカからの中古車。鉄道が発達していないメキシコではバスは重要な市民の足になっているからその数もすごい。だがそうしたバスは個人経営になっているらしく、客の取りあいの激しいバトルが見られる。



テポツォトランのシンボル神学校教会

(出所:<https://www.tepotzotlan.gob.mx/>)

ある日の夕方、テポツォトランからクワトロ・カミーノ駅行きのバスに乗った時の恐怖は今も鮮明におぼえている。高速道路57号線の側道をメキシコ方面に走っていたバスは、ラッシュアワーの渋滞にしぶれを切らし、ハンドルをいきなり左に切り道の縁石を乗り越え、草の生えた空き地を車体を大きく揺らして突っ切り、57号線のインター手前にある出口道に入り込こんで、対向車を物ともせず逆走。ついには57号線に合流するというまさに神業、荒技、無軌道ぶりを発揮したのだった。

小さな集落から

私がこの町を訪れたのは1987年で、外国人向けのツアーでのことだった。南の耕作地を見下ろす巨大な中世の建造物に、観光客はまず驚かされるが、この小さな田舎町にこれほど贅沢な建築物があるのに首をかしげることになる。その後何度となく訪れている。休日ともなればメキシコ市からたくさんの観光客が



ソカロに面したアーケード街 アーケード街はレストラン占拠

押し寄せ、閑散としていた町がいきなり交通渋滞を引き起こし、普段はおとなしい田舎のポリスの吹く笛が、ヒステリをおこすことになる。近年、高級別荘地となっている。



閑かな町並みは教会の北に 南の農地に建ち始めた高級別荘

町の中心のバロック様式の教会は、実はかつてのイエズス会のフランシスコ・ハビエル神学校付属教会で、今日では副王領時代博物館となっている。その北側にある教区教会堂は、もともとはイエズス会の修道院・教会で、植民地時代初期、メキシコで布教活動をしてきたイエズス会の拠点となっていたところのようだ。



教区教会堂の優雅なゲート 博物館前広場は休日民芸品市場

この地に最初に教会が建てられたのは 1600 年で、メキシコで活動することになる新参の修道会イエズス会のものであった。当時、すでに托鉢派のフランシスコ会、アウグスティヌス会、ドミニコ会がメキシコの人口密度の高い各地に修道院・教会を建設して、布教、改宗を推し進め、十分な成果を上げていた。いっぽう、後発のイエズス会には、自分たちの活躍可能な地域はほとんど残っておらず、メキシコ市から北 40km の郊外にある小さな集落に落ち着かざるをえなかった。



メキシコ植民地での修道会の収入源は、ディエスモ (10 分の 1 税) という宗教税、それから宗教サービス (結婚・葬式等) に対するお布施だったが、布教活動の領域が限定されていたイエズス会はメキシコ市に小学校や神学校を開設して、教育をその資金源にすることを考え出した。後にこのテポツォトランに神学と鉱山学のための学校を開設したのである。



神学校の図書館

16、17 世紀のメキシコではスペイン人入植者が先住民労働者をまさに“消費”して「人口破壊」を起こしていたのだが、その結果として入植者、あるいはクリオーリョ (メキシコ生まれのスペイン人) が裕福になり、当然のこととして彼らの子弟の教育に熱心になっていた。まさにイエズス会の神学校はその受け皿となったのである。前述したが、イエズス会の布教活動の現場は、他の修道会が無関心だった人口希薄なメキシコの北、今日のハリスコ州北部、シナロア州、ソノ

ラ州、バハ・カリフォルニア州にしか残されていなかったために、そうした地域に布教村を設けていた。巧妙なのは神学校の卒業生を修道士見習としてそうした布教村に送り込み、就職斡旋のシステムを形成していたことである。

さらに、重要な産業基盤である銀生産に対応するために、イエズス会は鉱山学のコースを設けて、卒業生を技術者として鉱山町に送り出すというしたたかな学校経営をしていた。それが男児を持つ新興メキシコ人たちの支持を取り付ける要因だったのである。

メキシコ経済をリードするイエズス会

メキシコ北部に展開したイエズス会の布教村は人口 300 人から 800 人程度の規模のもので、荒地を開墾し耕作地の半分を各家族に平等に分配し、残り半分を布教村の共有財産として住民全員で管理し、自給自足の理想郷を目指していた。さらに、彼らは個々の布教村での気候変動による収益の変化や災害などによる損失を和らげるために、布教村の組織化にも取り組んでいた。

1630 年頃、布教村の周辺部で鉱山を開業しようとするスペイン人入植者が出現した。そうしたスペイン人は自分たちの食糧も採掘労働力も持ちあわせていなかったために布教村の周辺部に入植し、布教村の食糧と労働力を当てにする鉱山主が現れたのである。

副王政府はヨーロッパとの交易で重要な産物である銀の生産を推奨していたために、労働力不足に悩むスペイン人入植者の要望を取り入れ、先住民をスペイン人の鉱山で働かせることができるという「労働力分配制度」を立ち上げた。そのことで農村の先住民を一週間から二週間程の輪番で、鉱山に送り込むことができるようになったが、その結果、布教村はスペイン人鉱山主へ食糧と労働力を提供し、その代価として銀を手に入れることができたのである。

イエズス会の場合、鉱山主との取引で得た銀はすべてテポツォトランに集荷され、それを元手に、修道士はメキシコ市に出向いて、布教村で必要な物品を廉価でまとめ買いしていた。そうした物品は年に一度、あるいは半年に一度、船やロバの背に積まれてイエズス会が管理する布教村へと運ばれて行った。そうして船とロバはその帰路に銀を集荷し持ち帰っていたのである。植民地時代、このテポツォトランの町には大勢の馬子が住み、馬やロバがたく

さん飼われていたという。また、持ち帰った銀を加工する金銀細工士がたくさん住んでいたともいわれている。

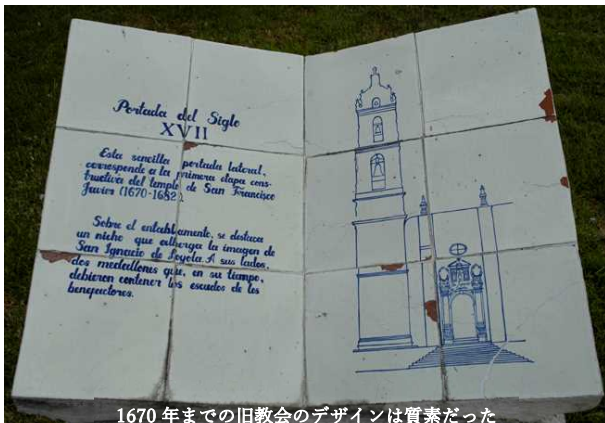
イエズス会は学校経営や布教村で得た資金を元手に貸金業を始めたり、土地を各地に買い求めてアシエンダ（大荘園）経営に乗り出したりしていた。イエズス会は18世紀初頭、植民地メキシコにあった500ものアシエンダのうち124を所有していたというから驚きである。さらに集約した土地を小作農民に貸し出して、地代を受け取ってもいた。

学校経営やアシエンダで得た資金はすべてこのテポツォトランに集められていた。やがて、イエズス会のメキシコ北部への情熱は、教団の安定した経営に向けられ、布教活動から脱線して本旨が置き去りにされたことは、ほかの托鉢型の修道会と異なっていた。

経済的に一人勝ちのイエズス会への他の教団やスペイン人経営者からの風当たりは強かった。先住民労働者不足に悩んでいた事業家は、布教村の先住民を雇用しようにも修道士の許可なしには使うことができないなどの不満を副王政府に訴えていた。こうした経済界の強い圧力によって、副王政府はついにイエズス会の布教活動停止を1765年に決定し、さらにスペイン政府は1767年、スペインの全領土からイエズス会を追放する決定を下したのである。詳しくは拙書『銀街道』（未知谷刊）を参照にされたい。補足するが、これはスペイン国内の問題であって、他の地域では起きていない。

豪華な教会堂建設の謎

フランススコ・ハビエル神学校付属教会が今日副王領時代博物館になっているのは何故だろう。その理由は、イエズス会がこの地に残していった至宝である。まずは外観、改築以前の図面を参考にすると、教会の



1670年までの旧教会のデザインは質素だった

鐘楼の高さと正面の意匠が以前に比べて大きく変わり、彫像の数が増えている。そして内観、鈍い灰色の

石材で作られたバロック建築からは想像もできない、正に宝石箱である。

教会本体の内壁は上から下まですべて黄金の祭壇



黄金で満たされた教会正面と内部装飾



側壁の黄金の壁型祭壇

で覆われ、それは建物の基本構造すべてをも覆い尽くしている。侘びや寂びをありがたく思う日本人には、理解の許容範囲をまったく越えている。

こうした空間構成の妙味？の他に、側壁の窓から差し込む光

りの演出を特記しないわけにはいかない。黄色のオニックスの薄板が窓にはめ込まれているのだ。その薄板をすり抜ける光の量子は、黄金の祭壇を一層、輝かしいものに仕上げるばかりでなく、この教会堂の基調色である赤を思慮深い赤に転位させる魔法を持っている。



オニックスの窓からの光が装飾を引き立てる

「天使の間」と私がかつてに名付けた教会左翼にある小さな礼拝堂は、豪華であると同時にまさに花園で、丸い天井ドームの東西南北に4体の愛らしい表情の天使のレリーフが我々を見下ろし、その中心の光り採りの、またひとつ奥まった所にも褐色の肌をしたお茶目



無数の天使が見下ろす天使の間の天井

な天使たちがたくさん顔をのぞかせている。宗教に関心のない者でもすぐに心をほぐし、思わず頬筋をゆるめてしまう空間だ。

三脚、フラッシュ禁止の博物館で私はその「天使の間」の撮影を中型カメラでトライした。感度の低いフィルムでは、暗い堂内を撮影するのにレンズを10秒も開けておかなければならない。広角レンズを天上に向けてカメラを床に据えると、頭がレンズに入らないように額を床につけ、祈るようにシャッターを押し続けて10を数えたのだった。そうした行為に他の観光客が敬虔な信者だと勘違いしたかどうか。が、誰も邪魔立てすることなく撮影ができたのは幸いだった。

すでに1740年頃からイエズス会は経済界との摩擦が顕著であることを認識していた。そのことを危惧していた修道士達は培って来た資産が世俗の手に渡る前に、この地でイエズス会が活躍したという証を残すために、そのすべてをこの教会につぎ込んだのではないかとさえ思える。

このフランシスコ・ハビエル教会の外観を撮影する



鐘楼が南に移設された新教会

たびにこの建物は私を不安にしていた。植民地時代のこの最高

傑作は、改築とともに鐘楼を北から南に移設したことで南側に重心を移してしまっただけでなく、そのためかこの教会が今にも丘の上から転げ落ちそうに見えてしまう。植民地メキシコで最後に布教活動を許されたイエズス会士たちは、ほかの修道会に追いつけ追いつけと必死に奮闘していたが、宣教に対する過剰な情熱がかえって仇となり、前足に重心をかけすぎてつんのめり、彼らの理想郷建設現場から足を滑らして墜落し、消えていったのである。

[写真複製不可][連載その9完]

阿部修二会員に「ぶらりメキシコ人旅」と題して、メキシコのあちこちを訪ね歩いたエッセイを連載していただいています。

- 第1回(2022年1月号): トラスカーラ
- 第2回(同4月号): ケレタロ
- 第3回(同7月号): ハルバン&コンカ
- 第4回(同10月号): ラング、ティラコ&タンコヨル
- 第5回(2023年1月号): シリトラのエドワード・ジェイムスの庭
- 第6回(同4月号): イダルゴ州の奥座敷「良く肥えた土地」アクトバン
- 第7回(同7月号): イダルゴ州の奥座敷2: サン・アンドレス・ティアングステンゴ
- 第8回(同10月号): イダルゴ州のもう一つの奥座敷3: イスキルバン
- 第9回(2024年1月号): テボツォトラン

阿部さんは2005年よりアミーゴ会会員。1947年岩手県花巻市生まれ。岩手大学工学部卒業及び桑沢デザイン研究所ビジュアル・デザイン科卒業。日本写真家協会元会員。メキシコ教会美術に惹かれ1986年より毎年渡墨。2005年以降4冊のメキシコ関係書籍を発行。最新作は『先住民のメキシコ—征服された人々の歴史を訪ねて』(2021年9月刊 明石書店)です。

[写真転載不可]

お知らせ **メキシコ歴史・文化講演会(3月~5月)**

メキシコの古代文明に焦点を当て、各文明の専門家に講演をお願いし了解をいただいています。現在、講師の講義・研究日程と開催日との調整中ですが、確定次第、改めてメルマガでお知らせします。

- アステカ 井上 幸孝 先生 (専修大学)
- テオティワカン 千葉 裕太 先生 (岡山大学)
- マヤ 市川 彰 先生 (金沢大学)

会場: メキシコ大使館別館 5階 "Espacio Mexicano"

日時: 3月~5月毎月1回。16:00~18:00(予定)

方式: 対面を原則にリモートの導入も検討中

最新の発掘と研究の深まりを踏まえた興味あるお話となります。皆さまこぞってのご出席をお待ちします。

お知らせ **第5回ラテンアメリカへの道フェスティバル**

「カリブ交流年」を祝して5月連休にお台場でFestival de Camino a Latinoamerica が開催されます。カリブの音楽やダンス、民芸品や食文化を楽しみましょう。

会場: お台場デッキ@ゆりかもめ「台場」下車すぐ

日時: 5月3日・4日・5日 11:00~19:00

主催: 日本ラテンアメリカ文化交流協会

HP: <https://www.cal-odaiba.com>

あとがき: 今の世に国家による公然殺戮が為されるとは驚天動地。人類の歩みとは一体何だったのかと自問自答の日々。然う斯うするうちに本誌発行がまたまた大幅遅延、と責任転嫁の常套手段。お詫びあるのみ。右肘痛を押しての編集作業もまた楽し。読者のご寄稿をひたすら鶴首。 [20240121 か]